

46 中間構文

能動文と受動文の中間的性質を持つ構文を**中間構文 (middle construction)**と呼ぶ。これを理解するため、まず、以下の3つの例文を考えてみよう。

- (1) a. John washes these shirts.
- b. These shirts were washed by John.
- c. These shirts wash easily.

(1a)は能動形であり、(1b)は受動形である。(1c)は意味上の目的語が主語位置に現れているという点においては受動形と同じであるが、動詞の形態は能動形である。

中間構文には様々な統辞的・意味的制約が課されることが知られている。まず、一般に、中間構文に用いられる動詞は他動詞に限られる。

- (2) a. This vinyl floor {lays/*lies} in a few hours.
- b. These mosquitoes {kill/*die} only with a special spray.
- c. The engine {lifts/*rises} out easily. (Fellbaum 1986: 2)

(2a-c)は、中間構文では、他動詞しか用いることができないということを示している。また、中間構文は何らかの副詞表現を義務的に要求するということが一般に言われる。というのは、以下のような副詞表現を伴わない中間構文は一般に容認されないからである。

- (3) a. *This magazine reads.
- b. *The clothes wash. (Fellbaum 1985: 22-23)

しかし、以下の例が示すように、中間構文における副詞表現の存在は義務的なものではない。

- (4) a. This magazine sells.
- b. This umbrella folds up. (ibid.: 23)

つまり、適切な文脈や情報が与えられていれば、副詞表現が存在しなくても容認可能な中間構文となる。(3a)と(4a)を比較すると、「読める」ということは雑誌(書物の)の当たり前の特性であるが、「売れる」というのは雑誌に対して有意味な情報を付け加えているものである。同様に、(3b)と(4b)を比較すると、服が「洗える」ということは服に関する当たり前の特性であるが、傘を「折りたためる」というのは傘に対して有意味な情報を付け加えていると考えられるため容認可能な中間構文となる。

中間構文の派生方法に関しては大きく2つの分析が提案されている。第1に、語

彙分析と呼ばれる分析である (Fagan 1988, 1992, Ackema and Schoorlemmer 1994, 1995 など)。語彙分析では、中間構文の動詞はレキシコン (辞書) の中で**外項 (external argument)** である動作主が抑圧されることによって自動詞化されると考えられている。つまり、中間構文の主語は以下に示すように最初から主語位置に生成されると分析される (動詞句内主語仮説を採用し、 t_i は these shirts が移動したことを示す)。

(5) [TP These shirts_i [VP t_i [V' wash easily]]].

第2は移動分析と呼ばれる分析である (Keyser and Roeper 1984, Stroik 1992, Fujita 1994 など)。移動分析では、目的語位置に生成された名詞句が主語位置に移動すると考えられている (Stroik 1992 に従い、動作主は PRO であると想定する)。

(6) [TP These shirts_i [VP PRO [V' wash t_i easily]]].

通常、他動詞はその目的語に対格を付与するが、中間構文における他動詞は何らかの理由で対格を与える能力が失われると想定し、その目的語は主格が付与される主語位置へ移動すると分析される。つまり、中間構文には受動文と同様の移動が関与していると考えるのである。(7) に示されているように、移動分析においては、外項である動作主が統辞的に利用可能であるので、以下のようにそれを顕在化させることが可能なのである。

(7) That book reads quickly for Mary. (Stroik 1992: 131)

Stroik によれば、(7) の for 句は動作主が統辞的に表出したものであり、Mary は本を読む動作主として義務的に解釈される。統辞的に外項が存在するという証拠は以下のような例にも見られる。

(8) a. This window opens easily with a knife. (Marelj 2004: 116)

b. *Bureaucrats bribe easily all by themselves.

(Keyser and Roeper 1984:405)

c. This car fixes easily even unaided. (藤田・松本 2005: 118)

(8a) の with a knife は動作主を必要とする表現である。(8b) で all by themselves が使用不可能であることは、中間構文には動作主が存在していると考えれば説明できる。(8c) の**二次述語 (secondary predicate)** の unaided はその「主語」として動作主を必要とする。これらの振る舞いは、動作主がレキシコンの中で抑圧される語彙分析よりも、動作主の存在を認める移動分析の方が妥当であることを示しているように思われる。

(永盛 貴一)